スウェーデン便り（21）　　橋本白道（陶芸家）

［発行日］＝2000 年 7 月 25 日

［本文］

ラマルティーヌの「オリエントへの旅」を読んだ記憶はない。一八三三年、彼がその本を執筆した華麗な建物の最上階の部屋から、六千年の歴史を持つプロヴディフの美しい旧市街を見下ろしている。

「スウェーデン便り」の最終稿を、ブルガリアの古都で書き始めることになろうとは思いもしなかったが、古い王宮の一室のような、ゆったりと広い部屋、美しいレースのカーテンとシャンデリア、大きくたっぷりとしたライティング・デスク、窓からは涼しい風、とくれば、ラマルティーヌならずとも、ノートとペンを取り出すのにやぶさかではない。

さて、「スウェーデン便り」というよりも「ヘリデン国民高等学校便り」としか言いようのない私の折々の記は、森の中のアートクラフト・スクールでの一年間の学園生活を、少しは具体的にイメージさせるものになり得ただろうか？

教育のシステムも、労働に対する考え方も、日本のそれとはあまりに違うので、逆に困惑の種をまいただけかもしれないと危ぐしている。

ただ、国民高等学校という、日本にその類を見ない特殊な学校をつぶさに見ることで、北欧と日本との違いや特質を浮き彫りにすることが出来たかもしれないと感じている。

それにしても、日本のような入試制度がないということが、どれほど学生生活をのびやかなものにしていることだろう。三十年ほど前、私が高校生だったころ、既に受験戦争とか受験地獄とかいう言葉があり、落ちこぼれ組で、ろくに机に向かうこともなかった私ですら、暗い青春時代であったことを苦々しく思い出す。

今の日本の学生たちが、相変わらず受験地獄のただ中に居るのかどうか知らないが、入試制度にも様々な選択肢があれば、青春もずっと明るいものになることだろう。

また、社会人になってからも、長期休暇を取って、自分のやりたいことを勉強するということが、当たり前のこととして受け入れられ、それを支える社会的・経済的システムが、きっちりと積み上げられていることはうらやましい。

かつて、一人の夢みる男がデンマークの田舎で、農業に携わる青少年の再教育のために始めた小さな学校が、このような形で北欧全体に広がり、ありとあらゆる階層の人たちのための再教育、あるいは自分探しの場を提供し続けていることに感銘を受ける。

一方、賢明な日本人はバブルの華が散った後、活性化というものは入れ物に金をかけることではなく、中身を充実させることのようだ、と気付き始めている。

だが、沈黙は金、雄弁は銀、という格調高い諺（ことわざ）や、金銭（税金の使い方も含めて）についての話は穢（けが）らわしい、という考え方は、私たちの内部に深々と根をおろしており、丁寧な討議と緻密（ちみつ）なコスト計算が、私たち日本人の国民的体質となるまでには、この先なお、夢食う男と百年の教育の積み重ねが必要なのかもしれない。

◇

橋本さんは九日に帰国。八月下旬に再びスウェーデンに渡り、イエーテボリ大学で研究を続ける予定。